

## 利用者にとって程よい距離感

(59)

屋中祐子

(福島県)

「愛の家グループホームいわき下荒川」

池田ナツさん(仮名)は認知症の症状が見られるようになり、小規模多機能居宅介護(自宅で生活しながら、通い・訪問・泊まりを組み合わせた。通いで来る見慣れない利用者を見かけると落ち着かなくなるなど、生活になじむことができませんでした。より安心できる環境で「自由な生活がしたい」という本人の思いをかなえるため、少人数で共同生活ができる当グループホームに入居しました。

入居当初、職員にはすぐ慣れましたが、他の利用者に対しては険しい表情を見せていました。特にテーブル席で向かい合わせに座った方には、興奮してテーブルを叩くなどの行動もありました。この様子から他



指相撲をしながら笑う屋中祐子さん(左)と池田ナツさん

者と対面することが池田さんにとっての不安やストレスになっており、興奮するなどの症状につながっているのではないかと考え、落ち着いて過ごせる環境をつくることにしました。

1人用のテーブルを用意し、キッチンそばに設置しました。他の利用者から少し離れた場所で過ごすことで、周囲を気にすることなく落ち

着いて過ごすことができるようになりました。また、キッチンのそばにしたことで、調理をする職員と顔を合わせて話す機会が増え、信頼関係を築くことができました。今では笑顔も見られ、気の合う利用者もできて会話を楽しんでいます。家族も初めは「1人の席は寂しいのでは？」と心配することもありましたが、池田さんの変化を見て「母にとって、とても良かった」と安心しています。

認知症の方は空間認識がうまくできなくなることがあり、近くの人やものに対して恐怖を感じることもあります。今回のように周囲の人と程よい距離を確保したり、周囲の視線を遮るものを設置することで、安心することができそうです。

「愛の家グループホームいわき下荒川」では、本人の思いを尊重し、ストレスなく過ごすことができるよう生活の工夫をするなど、心を込めた関わりを実践しています。